

「ハ」と「ガ」¹⁾

Maher ELSHERBENY

0. はじめに

「ハ」と「ガ」について種々の研究が行われている²⁾が、まだ、「ハ」と「ガ」の使い分けが十分、明確ではない³⁾。特に外国人日本語学習者（たとえば、アラブ人）に使い分けるのはとても困難である。従って、それらの使い分けを明確にすることが本稿の目的である。方法として、「焦点」⁴⁾からそれらを検討してみることにした。そのためにそれらを「義務的ハ」⁵⁾、「義務的ガ」⁶⁾、「選択的ハ／ガ」⁷⁾の三つに分けることにした。

1 「義務的ハ」：「質問文（例①）」、「時の文（例②）」、「理由文例（③）」、「既知文（例④）」、「対比文（例⑤）」の場合、重要な意義を表す節は後節である⁸⁾。後節に焦点が当てられているからである。焦点が後節に当てられている場合、助詞を使用したければ、「ハ」を使うしかないのである。つまり、「ハ」の使用は義務的になる。

1.1 「質問文の場合（例①）文の一番大切な単語は疑問詞である。疑問詞がなければ、質問文が成り立たない。質問文を表す品詞は疑問詞であるからである。疑問詞は後節に存在しているということは焦点が後節に当てられているということである。なぜなら、疑問詞は質問文の重要な意義を表す品詞であるからである。

①a あの人 ○ だれ（ですか）^{9) 10)}。(N.P.1)¹¹⁾

前節 助詞 後節

①b あの鉢はどなたのですか。(M.P.12)

①c ところで、あの事件の被害者の傷害の程度はどうでしたっけ？(M.P.6)

1.2 前節（今の会社のこと）より後節（小さな旅行社で働いていたこと）のほうが重要な意義があるから焦点が後節に当てられている。

②a 今の会社に入る前彼 ○ 小さな旅行社で働いていた。(N.P.69)

前節 助詞 後節

④c…、翌日そこからさらに、南下し、プンタアレナスに向かう。プンタアレナス○南半球最南端の港町だ。(S.P.15)

1.5「対比文(例⑤a)」の前節(特に牛肉が好きかどうかということ)は聞き手がたずねていることではない。後節(肉が好きかどうかということ)が問題になっている。返事は「肉の全ての種類が好きではなく、肉の様々な種類の中の一つが好きである。要するに肉の場合、好き嫌いがある」。焦点は後節(好き)に当てられている。このような対比文では焦点は後節に当てられているので、前節と後節の間に使用できる助詞は「ハ」のみである^{12) 13)}。

⑤a1 肉が好きですか。

2 牛肉 ○ 好きです。(作例)

前節 助詞 後節

⑤b1 日本語ができますか。

2 話すこと○できます。(作例)

⑤c1 日本語が難しいだろう？

2 漢字を覚えること○難しい。(作例)

2義務的ガ：「質問文」、「対比文」、「理由文」、「突然文」、「関係節」の場合、重要な意義を表す節は前節である。

2.1「質問文¹⁴⁾(例一a)」では、疑問詞は前節に存在している。つまり、焦点は前節に当てられている。焦点は前節に当てられている場合、「ガ」を使う義務がある。

一a1 どの人 ○ 田中さんですか。

前節 助詞 後節

2 あのめがねをかけた人が田中さんです。(N.P.2)

二b それでどんな会話○あったか、わからなかったかな？(MA.P.35)

三c いったい何○どうしたんだ?!(S.P.17)

2.2 「対比文¹⁵⁾ (例二A)」では、焦点は対比される物事に当てられる。例二Aでは、「速さ」について「バス」と「タクシー」が比べられている。「バス」と「タクシー」のどちらかということに焦点が当てられている。同じ事（たとえば速さ）について物事を比較する場合、「ガ」を使用する義務がある¹⁶⁾。

二A1 駅までタクシーで行きましょうか。

2 バスよりタクシーのほうがはやいですか。

1 ええ、タクシーのほう ○ ずっとはやいですよ。(N.P.14)

前節

助詞 後節

二B アルゼンチンでは1年のうちで1月○いちばん暑い。(N.P.14)

二C うまい、世の中でカニ○一番うまい！(S.P.238)

2.3 「理由文(例三)」：「こうすれば、こうなる」のような理由があって、「その理由で何かの結果が出来た」の場合、「ガ」が使用される。理由を示す品詞「と」は前節に出て、結果「見える」は後節に出ている。理由がなければ、結果がないので、理由は先に起こる。理由は前節に現れるから理由は結果より大事と考えられる。そのために焦点は理由を示す前節に当てられている。焦点は前節に置かれている場合、「ガ」を使わなければならない。

三A あの山の頂上に登ると、伊豆半島 ○ 見えるそうだ。(N.P.85)

前節

助詞 後節

B 二階のベランダから下を見ると、外の大きな通りまで窓の下○垂直に切りたっている。(S.P.16)

C <治療>という項目をみると、最初はいずれも、たいした自覚症状がなくて、発病し、放置しておくとうつ病や尿毒症○おこり、最終的には人工透析をするか手術して移植することに ―とも書かれていた。(P.P.21)

電車○遅れたために、私は大事な会議に遅刻してしまった。(N.P.71)

2.4 「突然文(例四)」では、突然、何かに気が付いたり、思い出したら、見つかったりした時に一瞬それのみに注目する。たとえば、(四A) 西を見た時、空が真っ赤であった。

西の空が真っ赤であることを推定していなかった。突然、想像していなかったことがあった場合、そこに注目がとれることはそこに焦点があたるということなので、「ガ」が使われることになる。

四A あっ、西の空 ○ 真っ赤だ。(N.P.41)
前節 助詞 後節

四b あれっ 財布○ない。おかしいなあ。どこか落としたのかなあ。
もう一度よくポケットの中をさがしてみたら。(N.P.63)

四C そこから二時間ほど走ったところで先頭のジープがいきなり止まった。……
「困った。道が消えてしまった」と、中島が我々に向かって言った。
(S.P.176)

2.5 「限定文(例五)」関係節では、限定することが目的である。たとえば、例五では、「これはだれが書いた絵か」つまり、「この絵を書いた人を知らせることが目的である」なので焦点は「書」という動作をした(人、物)を示す目的がある。これは英語の the、アラビア語の al の定冠詞と同じ働きをする。「ガ」は日本語の定冠詞の一つであるので、使う義務がある。

五a これは本田 ○ 書いた絵です。(N.P.74)
前節 助詞 後節

五b 学割がほしいですか。
これ○申込書です。これに名前や行先や枚数を書いてください。(N.P.29)

五c 三年前、ぼく○ノイローゼになったとき、その病院にぼくを連れていったのは妻だった。(S.P.18)

3 選択的ハ／ガ

3.1 「義務的ハ(「質問文」、「対比文」、「理由文」、「時の文」、「既知文」)」、または「義務的ガ(「質問文」、「対比文」、「理由文」、「突然文」、「限定文」)」が使われない場合に「選択的ハ／ガ」が使用される。「義務的ハ」と「義務的ガ」と「選択的ハ／ガ」の次例を対比してみるとそれらの違いが明確になる。

<1> あの人 ○ だれ（ですか）。
前節 助詞 後節

<2> どの人 ○ 田中さんですか。
前節 助詞 後節

<3>a 私 ○ 田中です。（作例）
前節 助詞 後節

<3> b 雨○降る。（M.P.113）

<3> c 私○医者です。（T.P.54）

例<1> では、疑問詞が後節に現れているので、焦点は疑問詞にあたるべきである。従って、「ハ」の使用が義務的になる。しかし、<2> の例では、疑問詞が前節に現れているので、焦点は疑問詞にあたるべきである。従って、「ガ」の使用が義務的になる。しかし、<3>では<1>、<2>aと違って、焦点が前節にあたるべきか、あるいは後節にあたるべきかを示すてがかりがないのである。従って、両節に当たり得ると考えられないことはない。意義の上で考えてみると両節に当たり得るとのことがわかる。<3>では「私」を強調するなら、焦点が「私」という前節に当ることになる。従って「ガ」をいれることになる。<3>を疑問文に変えれば「だれが田中ですか」になる。つまり、疑問詞は前節に入れることができるから焦点が前節にあたっているという証拠である。「田中」を強調するなら、焦点が「田中」という後節に当ることになる。従って「ハ」を入れることになる。これも疑問文に変えれば「私はだれですか」になる。つまり、疑問詞は後節に入れることができるから焦点が後節にあたっているという証拠である。

3.2 文に二つの動詞があり、一人の動作主は文に現れているが、一人の動作主は含意されている場合、それらの動作主が同一であれば、「ハ」が使用されるが、違う動作主であれば、「ガ」が使用される。たとえば、<20>では、「乗る」と「泣く」の動作主が同一であれば、「ハ」が使用されることになるが、これらの動作主が違う動作主であれば、「ガ」が使用されることになる。

<20>私○飛行機に乗るとき、泣いた。（I.P.166）

4 結語

「ハ」または「ガ」を入れることができる文を二節（前節、後節）に分けて、焦点が後節に当たる義務があれば、「ハ」を使用することも義務的になる。焦点が前節に当たる義務があれば、「ガ」を使用することも義務的になる。焦点が前節または後節に当りえるなら、表現者が焦点を後節に当てたければ、「ハ」を使用すべきであるが、前節に当てたければ、「ガ」を使用すべきであるという結論を導き出せるだろう。以上見たような「ハ／ガ」が焦点から考えれば、どのようになるかを図示するならば、本稿末の〔表2〕のようになろう。しかし、「ハ」または「ガ」を入れることができるを文完全に認識するまでにはいろいろな研究課題が残っている。

注

- 1) 本稿は(1994)カイロ大学文学部の“BULLTIN OF THE FACULTY OF ARTS ” に載せた論文の一部を要約し、加筆訂正したものである(参考文献)
- 2) 「ハ」と「ガ」の研究は17世紀(ロドリゲス)から始まった。それから、多くの研究者はそれらを問題にした。例えば、三上章1960は「ガ」に「有題」と「ハ」に「無題」という意味を、久野すすむ1977は、「ハ」に「主題」, 「対照」と「ガ」に「総記」、「叙述」、「対照」という意味を、大野晋1974, 1978は「ガ」に「未知」と「ハ」に「既知」という意味をとり出している。
- 3) 例えば、「ハ」と「ガ」使い分けはまだ充分解明されていないということについて安藤貞雄1986は、

「ハ」と「ガ」の使い分けの秘密は、いまだに完全解明されるに到ってはいないと言ってよい。最大の原因の一つは、これら2つの格助詞の解明にあたって、主格・対象格、主語と述語、題目と述部、既知と未知、古いインフォメーションと新しいインフォメーション等々、意味論、統語論、語用論の各レベルにわたる術語が、レベルの差を十分弁別しないままに使用されているため、議論が錯綜混乱しているのが普通である、という事情があると思われる」と挙げている。P, 142
- 4) 「ハ／ガ」が存在しうる文の場合、焦点が「ハ／ガ」の前の節に当てられているか、「ハ／ガ」の後の節に当てられているかという観点である。そのために文を前節と後節に分けてこれらの間に助詞「ハ／ガ」が入る。〔表1〕に出ている。
- 5) 「義務的ハ」とは使うべき「ハ」のことである。
- 6) 「義務的ガ」とは使うべき「ガ」のことである。

- 7) 「選択的ハ／ガ」とは「ハ／ガ」が使えるが使うか使わないかは表現者が表したいことによって選ぶ「ハ／ガ」のことである。
- 8) 前節と後節は二つのことによって分けられている。一つ目、まるうめ文の○がてがかりである。○の前は前節、○の後は後節である。二つ目、○に「ガ」または「ハ」が入ることと前提にされていること。
- 9) あの人はいだれですか。の「ですか」は省略できる。
- 10) あの人はいだれですか。の前節と後節の間に助詞を入れなくても通じる。たとえば、「あの人だれ」だけが親しい間柄ではよく使用される。
- 11) ()の中の最初の文字は用例出典したところの著者名の頭文字であり、P はページのことであり、その後の数字はページ数である。
- 12) 次のような表現にはハを使わなければならない。「～には～」、「～ては～」、「または～」、「～とは～」など。また「こんにちは」、「こんばんは」のような挨拶の言葉にも使われている「ハ」がここで取り上げている「ハ」と異なることに注意すべきである。
- 13) 「義務的ハ」の「対比文」の場合「ハ」は対立的対比を表す。たとえば、「鳥肉は好きです」というのは「…肉はきらい」ということであるが、「義務的ガ」の「対比文」の場合、対立的対比がない。たとえば、速さについてバスとタクシーを比較する場合、同じ事（速さ）について二つのもの（バスとタクシー）の程度を比べる。
- 14) 「義務的ハ」の「質問文」と「義務的ガ」の「質問文」は異なる。「義務的ハ」の「質問文」の場合、疑問詞は後節に現れているが、「義務的ガ」の「質問文」の場合、疑問詞は前節に現れていることに注意すべきである。
- 15) 「質問文」と「対比文」が重なる文がある。たとえば、（山口さんと川口さんでは、どちらのほうが若いのですか。N.P.7）には疑問詞（どちら）と対比詞（ほう）が同文に現れている。
- 16) ただし比較される物事は前節に出ているのみの場合である。

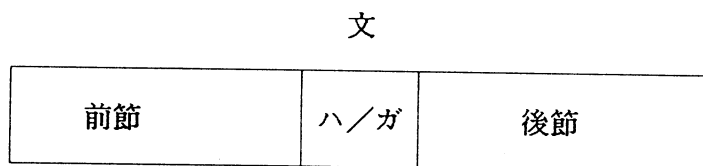
用例出典

- A 安藤貞雄1987 (参考文献注)
I 市川保子・本間倫子 (参考文献注)
MA 毛利甚八・魚戸おさむ1988『家裁の人』第一巻 小学館
M 三上章1960 (参考文献注)
N 野田尚使1985『日本語文法セルフ・マスターシリーズ1』くろしお出版
S 椎名誠1987『パタゴニア』情報センター出版局
T 寺村秀夫1978『日本語の文法(上)』国立国語研究所

参考文献

- 安藤貞雄1987『英語の論理・日本語の論理』三版大修館書店
市川保子・本間智子1990「取り立て助詞「ハ」導入のための一試案 — イラストと漫画で「ハ」を教える —」日本語教育70号
大野晋1974『日本語の文法を考える』岩波書店
——1978『日本語をさかのぼる』岩波書店
『文法と語彙』岩波書店
久野すすむ1977第3版『日本文法研究』大修館書店
Maher ELSHERBENY 1994 'Alwazifa Alasasiya llada Wa fi Alugah Alyabaniya'
"BULLTIN OF THE FACULTY OF ARTS "NO 62 March.1994 CAIRO
UNIVERSITY PRESS
三上章1960第5版『象は鼻が長い』くろしお出版

〔図1〕



〔図2〕

